淀川水系流域委員会
第16回猪名川部会(H14.11.8)
参考資料　3

河川管理者からの資料提供

河川水辺の国勢調査結果(抜粋)より

近畿地方整備局
猪名川工事事務所

近畿地方整備局 資　料　配　布	配布日時	平成１４年１１月７日１４：００

件 名	Ｈ１３年度「河川水辺の国勢調査結果」について

概 要	一級河川及び国土交通省所管ダム湖で、 ①生物調査（魚介類調査、底生動物調査、動植物プランクトン調査、植物調査、鳥類調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、陸上昆虫類等調査） の結果がまとまる。

取り扱い	――――――

配布場所	近畿建設記者クラブ 大手前記者クラブ 国土交通記者会（国土交通本省・全国版）
	神戸海運記者クラブ、神戸民放記者クラブ、みなと記者クラブ所属で資料が必要な方は、「近畿地方整備局記者クラブ」　清水（06-6942-1141 内線 2811）に問い合わせ願います。

問い合わせ先	［河川に関すること］ 近畿地方整備局　河川部　河川調整課 TEL 06-6942-1141　TEL 06-6942-0608 (17:00 ～) 河川調整課長　池口　正晃　内線 3651 ［ダム湖に関すること］ 近畿地方整備局　河川部　河川管理課 TEL 06-6942-1141　TEL 06-6941-7343 (17:00 ～) 課長補佐　吉村　貞孝　内線 3753 水資源開発公団　関西支社　TEL 06-6203-7531 施設課長　井尾　賢治　内線 381

近畿地方整備局管内版

平成13年度「河川水辺の国勢調査」結果について

○河川水辺の国勢調査

近畿地方整備局では、平成２年度より河川に関する系統的な基礎情報の収集整備を図ることを目的として、近畿管内の１級水系と近畿地方整備局所管ダムについて、生物調査（河川内並びにダム湖及びその周辺区域における生物の生息状況の調査）、利用実態調査（河川空間並びにダム湖及びその周辺の利用者数、利用状況等の利用実態の調査）を行う「河川水辺の国勢調査」を実施しています。

今回は、平成１３年度に実施した生物調査の結果、及び平成２年度から平成１２年度で２回の各生物調査が終了しましたので、近畿管内の１級河川と近畿地方整備局所管ダムの総合的なとりまとめ結果を公表します。

○今回取りまとめた調査

1．平成13年度　生物調査（河川、ダム湖）

2．平成2年度～平成12年度　生物調査とりまとめ（河川、ダム湖）

【河川：植物調査】　調査対象河川：円山川

今回のとりまとめの円山川で、外来種群落面積が増加。

円山川の植物調査結果について、代表的な外来種の群落面積をみると、アレチウリ、オオブタクサの群落がいずれも増加傾向となっています。

【河川：鳥類調査】　調査対象河川：猪名川

今回のとりまとめの猪名川で、生態系の上位に位置する猛禽類のミサゴ、オオタカを確認。

猪名川で猛禽類のミサゴ、オオタカが確認されました。ミサゴは前回も確認されています。オオタカは今回初めての確認です。

ミサゴは主に魚を餌とする河川や水辺への依存度の高い種です。社会的に関心の高いオオタカは小鳥やネズミなどの小動物を餌としています。これらの食物連鎖の上位にある猛禽類の生息状況は、その地域全体の生態系の健全度の指標になります。

【河川：両生類・爬虫類・哺乳類調査】1　調査対象河川：淀川、木津川、瀬田川、九頭竜川

ミシシッピアカミミガメが瀬田川で初めて確認されました。

ミシシッピアカミミガメが、瀬田川で初めて確認されました。

なお、淀川、木津川、九頭竜川では前回調査に引き続き確認されています。

北米産のミシシッピアカミミガメは、いわゆる「ミドリガメ」として販売・飼育されていたもので、河川や池沼、水田などに広く分布することから在来種のイシガメやクサガメと生息環境が競合することが考えられ、これら在来２種の生息に影響を与えることが懸念されています。

【河川：両生類・爬虫類・哺乳類調査】2　調査対象河川：淀川、木津川、瀬田川、九頭竜川

ヌートリアが淀川で初めて確認されました。

ヌートリアが、淀川で初めて確認されました。

ヌートリアは、大型のネズミ類で、戦前に毛皮を取る目的で移入され、現在では野生化しています。南アフリカ原産で、水辺に生息し、水草などを食べます。

過去の調査では、由良川、北川、円山川、加古川、揖保川で確認されています。

平成13年度　生物調査結果概要表（河川）

生物調査名	水系名（河川名）	今回調査		前回調査（参考）		備考
		確認種数	調査地点数	年度	確認種数	
1. 魚介類	新宮川水系	73（ 3 ）	4	H8	43	
	淀川水系（野洲川）	38（ 3 ）	5	H8	48	
	由良川水系	41（ 4 ）	10	H8	61	
2. 底生動物	新宮川水系	200（ 3 ）	4	H8	137	
	淀川水系（野洲川）	151（ 3 ）	4	H8	144	
	由良川水系	352（ 7 ）	7	H8	188	
3. 植物	円山川水系	806（ 40 ）	1060.4ha	H9	733	
4. 鳥類	淀川水系（猪名川）	75（ 4 ）	3	H8	78	
5. 両生類・爬虫類・哺乳類	淀川水系（淀川）	29（ 0 ）	10	H8	30	
	淀川水系（木津川）	36（ 2 ）	5	H8	37	
	淀川水系（瀬田川）	26（ 0 ）	5	H8	16	
	九頭竜川水系	30（ 0 ）	6	H8	32	
6. 陸上昆虫類	紀の川水系	1,130（ 2 ）	8	H8	739	
	北川水系	996（ 1 ）	3	H8	1,026	
	加古川水系	800（ 0 ）	5	H8	959	
	揖保川水系	938（ 5 ）	5	H9～10	964	

※魚介類の確認種数は、魚類のみ示しています。

※今回調査における確認種数の（ ）は特定種で内数です。（詳細は別表－1参照）

※植物の調査地点は調査範囲を示しています。

生物調査名	目名	科名	種名	文化財保護法	種の保存法	自然公園法	レッドリスト	レッドデータブック	新宮川水系	紀の川水系	大和川水系	淀川水系 淀川	淀川水系 木津川	淀川水系 野洲川	淀川水系 瀬田川	淀川水系 草津川	淀川水系 曽我川	由良川水系	北川水系	九頭竜川水系	円山川水系	加古川水系	揖保川水系	備考
鳥類調査	コウノトリ目	サギ科	チュウサギ				準絶滅危惧										●							
	タカ目	タカ科	ミサゴ				準絶滅危惧										●							
			オオタカ		国内希少野生動植物種		絶滅危惧Ⅱ類										●							
	チドリ目	カモメ科	コアジサシ				絶滅危惧Ⅱ類										●							
	合計																3							
両生類・爬虫類・哺乳類調査	サンショウウオ目	オオサンショウウオ科	オオサンショウウオ	特別天然記念物				準絶滅危惧				●	●		●					●				
	カメ目	スッポン科	スッポン					情報不足				●	●		●					●				
	合計											0	2		0					0				
陸上昆虫類等	トンボ目	モノサシトンボ科	グンバイトンボ				絶滅危惧Ⅱ類			●									●			●	●	
	カメムシ目	ヨコバイ科	ナカハラヨコバイ				情報不足			●									●			●	●	
		ツチカメムシ科	シロヘリツチカメムシ				準絶滅危惧			●									●			●	●	
		イトアメンボ科	イトアメンボ				絶滅危惧Ⅱ類			●									●			●	●	
		コオイムシ科	タガメ				絶滅危惧Ⅱ類			●									●			●	●	
	チョウ目	シジミチョウ科	シルビアシジミ				絶滅危惧Ⅰ類			●									●			●	●	
		ジャノメチョウ科	キマダラモドキ				絶滅危惧Ⅱ類			●									●			●	●	
	合計									8									1			0	5	

※表中の●印は確認種を示す。

※▒は、今回調査対象河川を示す。

凡例

文化財保護法

国指定特別天然記念物、天然記念物

種の保存法 ：「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」

国内希少野生動植物種

自然公園法

指定：自然公園法の指定植物(全国共通)

レッドリスト ：「日本の絶滅のおそれのある野生生物のリスト」

魚類；環境省編(1999)

絶滅：我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

絶滅危惧ⅠA類：ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

絶滅危惧ⅠB類：ⅠAほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足：評価するだけの情報が不足している種

地域個体群：地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群

底生動物：環境省編(2000)

絶滅：我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

絶滅危惧I類：絶滅の危機に瀕している種

絶滅危惧II類：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足：評価するだけの情報が不足している種

地域個体群：地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群

陸上昆虫類：環境庁編(2000)「無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリストの見直しについて」

絶滅危惧Ⅰ類：絶滅の危険に瀕している種

絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足：評価するだけの情報が不足している種

レッドデータブック　環境省編(2000,2002)「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」

植物：環境省編(2000)、鳥類：環境省編(2002)、両生類・爬虫類：環境省編(2000)、哺乳類：環境省編(2002)

絶滅：我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

野生絶滅：飼育・栽培下でのみ存続している種

絶滅危惧ⅠA類：ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

絶滅危惧ⅠB類：ⅠAほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

絶滅危惧Ⅱ類：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧：現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足：評価するだけの情報が不足している種

地域個体群：地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群